

荒川なのに“海洋ごみ”研修!? —企業と一緒に海洋ごみ対策

NPO法人 荒川クリーンエイド・フォーラム 今村 かずゆき 藤森 夏幸 五十嵐 実

環境問題の解決には、行政や企業だけではなく、市民セクターの貢献も欠かせない。しかし、日本においては、残念ながら多くのNPOはその経営基盤も弱く、人材の育成や定着も大きな課題となっている。そのような中、荒川クリーンエイド・フォーラムは、企業研修としてのごみ拾い「荒川クリーンエイド研修」を行なっている。本稿では、その概要について紹介する。

荒川の流域人口は約1千万人といわれている。沿川住民が使用するプラスチックの量はおそらくかなりの量になると推測される。その極僅かでも自然界に出たとしたら一体どうなるか。それを示すのがこの荒川下流域の写真であろう(写真1)。

もちろん、この状況に対してただ指をくわえて見ていたわけではない。清掃活動を行うことで除去が可能である。しかし、除去後数か月もすれば再びかなりの量の河川ごみが、上流や上げ潮時の東京湾から流れ着き、堆積する。もうダメだとあきらめて除去しなければ、台風等の出水時に東京湾に流出することだけが明白となっている。

これまで河川ごみの挙動やどのような経路を経て流出するのかなどについて探ろうとした研究はいくつかある^{1,2)}。しかし、一つひとつのごみの出どころを探るのは容易ではないであろう。荒川にある



写真1 緊急エリア

河川ごみは不法投棄、河川敷生活者の生活によって生じたもの、彼らが河川敷内に持ち込み流出したもの、上流部の埋立地が崩落したことに伴って流出したものの、上げ潮時において東京湾から逆流したものなど多様であると考えられる。沿岸部がヨシ等の植物に覆われている場所には絶えず河川ごみがトラップされる。

荒川クリーンエイドはClean(きれいに) + aid(助ける) という意味の造語で、当時の建設省と沿川自治体が「荒川下流部ゴミ対策アクションプラン」や「荒川下流部ゴミ対策協議会」という仕組みを整備することによって維持されてきた清掃活動のことで、年間参加者数1万人以上(累計20万人以上)である。2000年代後半、企業のCSR活動が盛んになった頃から企業の参加が増加した。2009年より「荒川クリーンエイド研修」が先々代事務局長によって開発された(図1)。現在、開発当初のエピソードを知るスタッフは全員退職してしまったのでないが、当時のプログラム内容を受け継ぐ、「荒川クリーンエイドを通じたチームビルディング研修」が今も改良されながら続けられている。研修内容の詳細は企業(NPO?)秘密であ

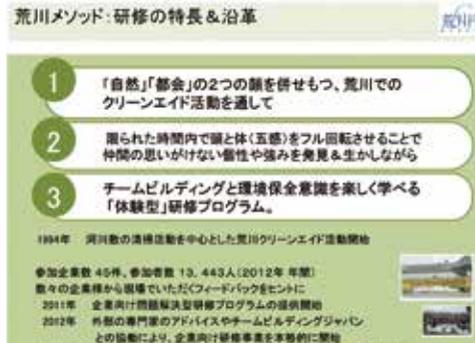


図1 研修の特長と沿革 (2014年当時)

るが、荒川の河川ごみ問題や生物多様性を軸にした座学(写真2)とフィールドワーク(写真3)の組み合わせで構成されている。また、チームビルディング研修から派生して、2017年に開発された「システムシンキング研修」もある。これは河川/海洋ごみ問題という複雑な事象に焦点を当て、視野を広げて、事象のさまざまなつながりや背景にある構造・影響関係への理解を深めながら、より根本的・本質的な問題解決に向けた打ち手をループ図等を用いて探ろうとするものである。しかし、せっかく開発したこのプログラム、ニーズ



写真2 座学



写真3 フィールドワークの現場から

† 2019年6月現在、荒川クリーンエイド・フォーラムの個人寄付額は月平均200円程度
†† 単位量あたりの財(モノやサービス)の投入によって得られる効果。次第に減少する

参考文献

- 1) 南まさし, 尾ノ井龍仁, 二瓶泰雄, 西島拓哉, 堀田琢哉, 船本優月, 金子博, 大谷明, 片岡智哉, 日向博文: 河川漂流ゴミ輸送量の自動連続モニタリング手法の開発と最上川観測への適用, 土木学会論文集B1(水工学) 第71巻, 第4号, pp. I_1225-I_1230 (2015)
- 2) 船本優月, 二瓶泰雄, 南まさし: 江戸川・最上川におけるGPSフロート調査に基づく河川漂流ゴミ挙動の検討, 土木学会論文集B1(水工学) 第72巻, 第4号, pp. I_979-I_984 (2016)

があまりないのが残念である。

国(国民性、教育)や地域性にもよるが河川/海洋ごみ問題には“善意のその先の問題”という一面がある。自然界に出てしまうほんの数%が積み重なって生じる問題であるためだ。限界効用逓減の法則^{††}に照らし合わせると、完全なる解決はかなり難しいが、過剰包装など本当に必要のない使い捨てプラスチックの利用や、自然界に出てしまうほんの僅かなごみを厳正な管理によって徐々に減らしていくしかないであろう。「荒川クリーンエイド研修」はそんな河川/海洋ごみ問題という逆境を逆手に取り、企業に原体験を提供することで捨てる人を減らし、拾う人を増やすものである。これまで、金融や製造業などを中心に累計5千人以上が荒川クリーンエイド研修を体験した。この研修の効果は個々の体験者に因るだろうが、少なくとも「日本はきれいな国」という先入観はどこにでも当てはまるものではない、ということを知る機会にはなっているであろう。